

第 38 回土木計画学研究発表会（秋大会）：2008 年 11 月 1 日～3 日（和歌山大学）
セッション討議内容の記録

セッション名：交通行動分析（1）	
日付：11月 1日（土）曜日、セッション時間： 9：00～10：30	
司会者名（所属）：中野敦（計量計画研究所）	
討 議 内 容	セッション全体：各発表の内容・討議すべき事項に重複が少ないため、3 篇個別に発表・質疑応答を行った。主な質疑内容は以下の通り。 ＜ ○質問 ●回答 ☆コメント ＞
	（140）鈴木崇正（東京工業大学）：航空によるCO₂排出の現状と将来予測に関する基礎的研究 ○航空の将来需要とCO₂の予測手法を研究しているが、政策評価に繋げることはできないか。 ●現在はそこまで至っていないが、将来的には、そのような展開を考えたい。 ☆説明変数は人口とGDPなどであるが、政策評価につなげるためには拡充を検討すべき。 ☆手法の時間的安定性を評価するため、現況に加え過去のデータでの再現性チェックできないか。 ●データは利用可能なので、今後検討したい。
	○航空機のCO₂排出総量に占める割合は、どの程度か。研究対象として重要性はあるのか。 ●運輸部門の排出量の13%を占めており、排出削減を検討する必要は十分にある。
	（141）堂柿栄輔（北海学園大学）：時間制限駐車区間での路上駐停車行動の判別について ○時間制限駐車区間（パークングメーター等）における行動（利用するか、規定の料金を支払うか）の要因に、より多くの要因が考えられる、例えばその地点の交通流の状況も影響しているのではないか ●一般論としてはさまざまな要因が考えられるが、ここでは、これまでの研究の経験から設定した。 ☆分析の元となっている調査は観測によって行われており、対象者にヒアリングするなどして、心理的な要因や詳細な属性・行動などを把握し、分析することができるのではないか。 ●調査方法による制約はこの研究の課題と考えている。
	（142）吉儀和恭（宇都宮大学）：大規模小売店舗における日來客数原単位の経年変動の実態 ☆施設の交通の原単位は、個々の施設による変動が非常に大きいため、経年変動があったとしても、相当大きな変化でないと実用上は意味を持たないと考えられる。 ●実態をみると3～4割といった大きな変化が観測される例があり、無視できないと考えている。
	☆大規模ショッピングセンターで床面積が大きく増加したのに、交通量（交差点の通過交通量）は減少しているとの分析をしている。通過交通だけでなく、店舗への来客も減少しているのがわかれば、店舗にとっても交通対策が有効であるとの説得資料として有効ではないか。 ●現在の調査では、そのような情報は把握していないが、重要な視点と考える。
	○現在のモデル（都心部と郊外部を選択するハフモデル）では、地域内の全店舗の選択を100%として、都心と郊外の選択を表現しているが、それは妥当か。 ●モデルはそのような仮定で構築している。実際には、買物客が都市圏外から来訪して総量が増加することもあるが、周辺地域の中での宇都宮都市圏の人口割合が大きいので、大きな問題はないと考える。